

令和7年度 東京都立大森高等学校 学校経営報告

(全 日 制 課 程)

校 長 池 田 美 穂

I 目指す学校像

「敬愛・誠実・努力」の校訓のもとに、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備え、知徳体の調和のとれた心身ともに健康な若人の育成を教育目標とし、1年次からの少人数指導や進路ノートを活用した進路指導等の教育活動を通して、人々に愛され、社会に貢献できる人間の育成を以下の点を重視し、全教職員が一丸となって教育活動を行った。

- ・歴史と伝統を受け継ぎ、学校生活を通して様々な経験をさせ、自己肯定感や他者と協力する態度を身に付けさせる。
- ・豊かな個性と自首・自立の精神を備え、互いの人格を敬い、社会に貢献する力や社会に出た後も学び続けようとする資質・能力を育成する。

II 今年度の取組と自己評価 (A:高度に達成, B:おおむね達成, C:もう一歩, D:抜本的改善が必要)

1 教育活動への取組と自己評価

(1) 教育活動・学校経営全般

目標と方策	取組と学校評価	自己評価
<p>ア 様々な文化のシャワーを惜しみなく注ぎかけることで、在学中の学習意欲を喚起し、卒業後も生涯に渡り学び考え行動できる生徒を育てる。</p> <p>イ 全ての教職員が主体的に学校経営参画意識をもち、それぞれの役割を確実に果たしながら、建設的な改善提案のできる職場風土を醸成する。</p> <p>ウ サービス事故ゼロ、学校事故ゼロを実現する。</p> <p>エ 生徒の心身の健康保持増進のために、教育活動に取り組む教職員のライフ・ワーク・バランスを図る。</p> <p>オ 経営企画室機能を最大限活用し、人材や施設設備等の校内資源を最大限活用しながら、教育環境の向上を図る。</p>	<p>ア SIP 拠点校事業による自然探究活動と東京サイエンスフェアへの参加、JAMSTEC 及び東京学芸大学研究室訪問等の実施、「笑顔と学びの体験プログラム」によるサンドアート体験など、科学技術や文化への興味関心を引き立て、生徒に多くの体験をさせることができた。</p> <p>イ 学年と分掌、YSW や SC の連携により、毎月1回の校内研修により、課題を抱える生徒の情報と対応法等の共有化、防災シミュレーション研修や人権に関する研修を実施し、教職員全体での共通認識を醸成し、活発で建設的な意見交換を実施することができ、「チーム学校」としての基礎を築くことができた。</p> <p>ウ 教職員が気軽に校長室を訪れることができるよう常に校長室ドアを開放し、平素から教職員との意思の疎通を図ってきた。このためサービス事故等の未然防止に努めることができた。</p> <p>エ 教職員には精神疾患等で休職する者はおらず、概ね定時に退庁できており、ライフ・ワーク・バランスを保つことができた。今年度から「教職員アウトリーチ事業」を取り入れ、教職員の心身のケアに努める体制を作ることができた。</p> <p>オ 「生涯の健康に関する理解促進事業」実施校として北海道で開催された「第53回全国性教育研究大会」への若手教員の派遣、日本語が不自由な生徒に対応、生徒の基本的な生活環境確立のために次年度からの昼食環境整備など、教職員と経営企画室を連携させて、外部人材を招聘して対応するなど臨機に対応できた。</p>	<p>A</p>

(2) 学習指導 「わかる」

目標と方策	取組と学校評価	自己評価
<p>ア 日々の授業を大切にすることで基礎基本の学力の確実な定着を図る。粘り強い指導で生徒の転退学を減少させる。</p> <p>イ 知識・技能だけでなく主体的に学びに向かう力を育成し、自ら考えて課題解決に至ることができるよう、思考力・判断力・表現力を鍛える。</p> <p>ウ 情報機器を適切に活用し、収集した情報について有用性や正誤の判断を自ら行いながら取捨選択をして理解を深め、発信ができる力をつける。</p> <p>エ 図書館を活用し、文化や芸術に関する知見を広めるとともに、自分の考えの根拠を発信する表現力を育成する。</p>	<p>ア 令和8年3月1日現在で、23名の転退学があったが、昨年度同時期より6名減少した。学年と自立支援担当との連携を深め教育相談の体制を強化させた。教職員に対しては常日頃から、生徒の特性を理解し親身で粘り強い指導を行うように指導しており、このため安易に生徒を転退学させない意識が教職員にも浸透し、適切な進路相談を行うことができた。</p> <p>イ 授業観察や研究授業の機会をとらえ、授業の進め方など助言や指導を与えることができた。対話的な授業の推進の他、キャリア教育委員会を中心に学年が連携し、「総合的な探究の時間」「人間と社会」では気づきを深め、学年の枠を超えて学んだことを発表させるなど、思考力・判断力・表現力の基礎力の育成を図ることができた。</p> <p>ウ 授業での「一人1台端末」活用では、端末の活用を意識した授業改善が見られた反面、生徒に端末を持ってこさせる指導の徹底が不足する場面もあり、情報機器活用では課題が残った。</p> <p>エ 司書教諭と図書館専門員との連携により、校内で初めてビブリオバトルを実現できたことなど、図書館利用を推進できた。蔵書については、本校生徒の特性や社会の動きをとらえながら、内容の硬軟について柔軟に対応することで、より活用推進を図る。</p>	B

(3) 生活指導 「まもる」

目標と方策	取組と学校評価	自己評価
<p>ア ルールとマナーの必要性を理解させ、人権と生命を尊重する、礼儀正しい森高生であることを求め続ける。</p> <p>イ TPOに応じた身だしなみや所作について、教員の一方的指導によらず、生徒が考える機会を設定する。</p> <p>ウ 生徒自らの未熟さと相手の立場とを理解し、適切なコミュニケーションがとれるように考えたり実践したりする場を設ける。</p> <p>エ 時間を意識して行動し、準備を怠らない。</p> <p>オ 清掃や整頓に進んで取り組み、居心地のよい校内環境を維持する。</p>	<p>ア 東京都生活文化スポーツ局や東京都教育庁と本校生活指導部・生徒会が連携し、自転車乗車用ヘルメットの着用普及に関する東京都の企画に貢献できた。都教委表彰も受賞できた。また、この活動を通じて、全校生徒に対して自他の命を守るための自転車の安全運転を啓発することができた。</p> <p>イ 生活指導部を先頭に、教職員一丸となって生徒の服装指導を適切に行うことができた。従わない生徒についても粘り強く指導し改善させた。生徒会長自ら、指導を守ることが、生徒全員の学校生活を充実させることにつながると訴えるなど、生徒自身が主体的に考えることができるようになってきた。</p> <p>ウ 特別指導において、安易に進路変更を求めるのではなく、期間や内容についても、教職員が生徒の特性を理解し、個に応じた指導となるよう徹底した。教職員が校長の意図をよく理解し、生徒に親身に、かつ粘り強く向きあったことで、生徒の変容を得ることができた。</p> <p>エ 「一日のクラスあたりの平均遅刻者数」は昨年度よりも僅かだが減少した。次年度も「生涯の健康に関する理解促進事業」等を活用しながら、生徒に対して粘り強く指導を継続していく。</p> <p>オ 経営企画室、総務部及び生活指導部と学年が良く連携し、清掃をこまめに行い、居心地の良い環境を維持できた。</p>	A

(4) 進路指導 「つかむ」

目標と方策	取組と学校評価	自己評価
<p>ア キャリア教育の観点から「人間と社会」「総合的な探究の時間」と意図的計画的に関連付け、単なる出口指導にとどまらない進路指導を行う。</p> <p>イ 学年進行に応じた計画的な指導を行い、個に応じた丁寧な対応を継続することで、高い進路希望を諦めさせない。安易に転退学の選択をさせない。</p> <p>ウ 進路実現が日々の学習や学校生活と一体化したものであることを意識づける。</p> <p>エ 公募される様々な機会をとらえ、生徒にとって生涯にわたり知識を広め経験を深めるチャンスであることを教職員が意識し、紹介する。</p>	<p>ア キャリア教育委員会を中心に、学年と綿密に連携をとり、「人間と社会」「総合的な探究の時間」を学年任せではなく、組織的にかつ系統的に進める形ができてきた。本校の生徒の特質からも、学校推薦型選抜や総合型選抜入試等による進路選択が多く、次年度も見据えて、今年度の指導方法を継続かつ深化させていく。</p> <p>イ 学年と進路指導部の連携により、生徒一人ひとりの進路をケアできた。昨年度と同様に高い進路決定率を維持できた。また、進路未決定者に対しても、卒業後も手厚い指導を行っている。</p> <p>ウ 「生活指導即進路指導」という意識を教職員に浸透させ、基本的な生活習慣の確立と、規範意識が自己の進路を拓くことを指導できた。</p> <p>エ 「高校生の海外派遣事業」に初めて生徒を参加させ、見聞を広めさせただけではなく、その還元発表会を行い、他の生徒に世界のダイナミックな動きを共有させることができた。東京都が公募する様々な参加型事業にも生徒を送り、社会体験を積ませることもできた。スキルアップ推進校事業のジョブキャンプでは1学年全体が参加し、自己と社会の関わりを考察させることができた。着任以来、校内研修等において、生徒に「文化のシャワー」を惜しみなく浴びせることを指導してきた。教職員も校長の意図を良く理解し、意欲的に生徒活動に取り組んだ。次年度も生徒の経験を増やし深める働きかけを組織的・計画的に行っていく。</p>	<p>A</p>

(5) 特別活動・部活動・教育相談 「つなぐ」

目標と方策	取組と学校評価	自己評価
<p>ア 教職員は正しく「いじめ」の定義を理解し、生徒間のいじめ防止、早期発見、早期対応に取り組む。</p> <p>イ HRや行事を通じ、協力や助け合いの経験を通じ多様な価値観や立場の違いを知り、社会で生きる力を育成する。</p> <p>ウ 安全教育推進校として防災教育の充実に取り組む。</p> <p>エ 自己の興味・関心に応じて文化・スポーツを 楽しんだり、努力して成果を得る体験をしたりする場を多数設定し、学校の居心地を高め、心身ともに健康で明るい学校生活にする。</p> <p>オ 特別支援教育への理解を深め、組織的な教育 相談体制を構築する。</p>	<p>ア 「いじめアンケート」による問題の早期発見と解決、教育相談体制の強化に取り組み、校内研修を通じて教職員相互に共通認識を深めることができた。</p> <p>イ 体育祭や文化祭等を通じて、生徒同士が意見を交わし協働して団結と創造力を培うよう、全教職員が協力して指導することができた。</p> <p>ウ 防災クイズを避難訓練と組み合わせるなど、緊急時に高校生として求められる役割を生徒に意識付けることができた。次年度は、生徒の命を守るために、教職員に対する避難訓練（指揮系統・避難誘導法・報告等）をより具体的に実施する。</p> <p>エ 「笑顔と学びの体験活動プロジェクト」を実施し、サンドアートを体験する場を設け、多様な表現方法を知ることができた。部活動を活性化するために、次年度は「部活動体験週間」を設け、部活動を充実し、心身ともに健全で明るい学校生活を送れるようにするとともに、生徒の居場所づくりとしたい。</p> <p>オ 学年と総務部が良く連携をとり、外部機関を交えたケース会議の開催等、生徒の特性を教職員間で共有し、指導に反映させることができた。</p>	<p>B</p>

(6) 募集・広報活動

目標と方策	取組と学校評価	自己評価
ア 学校説明会・見学会だけでなく、中学校訪問や地域交流行事等に積極的に参加し、学校の露出を増やす。 イ 生徒の姿が見える広報活動を意図的に計画する。 ウ 学校ホームページだけでなく、SNSを活用し、積極的な情報発信を行う。 エ 視覚情報の充実した広報媒体を作成する。 オ 入選方式について不断の検討を行う。	ア 「#だから都立高」の撮影舞台となるなど、東京都の協力を得て、学校の魅力を発信することができた。説明会等以外にも、中学校訪問を積極的に行い、微増ではあるが第一次募集の倍率増につながった。 イ 大田区や池上地区のイベントへの参加やボランティア、校内で開催した天体観測会、池上図書館とのイベント共催など、生徒を前面に出した活動を実施できた。 ウ インスタグラムを始めたが、更新頻度に課題が残った。生徒の活動を積極的に発信できるよう体制を整える。 エ 学校案内をリニューアルし、読みやすく内容もさらに充実できた。 オ 文化・スポーツ等特別推薦に新たにダンスを加えたことで、硬式野球以外の本校の特色を生かした入学者選抜を実施できた。	B

2 重点目標への取組と自己評価

(1) 全般

前年度の課題を踏まえて、探究活動の在り方をはじめ、生徒指導や広報活動等、新規事業を経営に取り入れながら、学校改革を進めてきた。少しずつではあるが成果が現れてきており、今後も継続と定着・発展を図る。

(2) 各重点目標

ア 教育活動・学校経営全般

(ア) SIP 拠点校事業

実施事項	実施時期	数値目標	参加人数
自然探究第1回(多摩川流域調査)	令和7年5月10日		3人
自然探究第2回(多摩川流域調査)	令和7年6月9日		3人
自然探究第3回(高尾山麓域調査)	令和7年7月29日		3人
自然探究第4回(御岳山・多摩川上流域調査)	令和7年8月22日		3人
自然探究第5回(多摩川流域調査)	令和7年9月27日		3人
自然探究第6回(探究まとめ活動)	令和7年10月17日		3人
TOKYOサイエンスフェア発表会	令和7年11月16日		3人
SIP拠点校研究成果発表会	令和7年12月		3人
株式会社ロボットライド見学	令和7年8月25日		8人
JAMSTEC横須賀本部見学	令和7年8月26日		9人
東京学芸大学研究室訪問	令和7年12月24日		13人
参加者(延べ)合計		30人	55人
【取組と自己評価】 ・SIP拠点校担当者の企画力、生徒への働きかけで数値目標以上の生徒が参加できた。 ・今年度の実施事業は探究活動に力を入れ、フィールドワークを通じた東京都の自然の豊かさを体感させることができた。 ・今年度で事業は終了するが、事業を継承させる新たな取り組みを推進することが課題である。			
【自己評価】 A			

(イ) 教員の年休取得率平均15日以上

実績等	数 値
令和6年度実績	72.1%
令和7年度数値目標	70.0%
令和7年度数値実績	60.1%
【自己評価】 C	

イ 学習活動 「わかる」

(ア) 教員相互の授業参観一人年2回以上

【取組と自己評価】
・授業観察期間や研究授業時に教職員に働きかけた。特に初任者等年次研対象者の研究授業については、多くの教職員が授業を参観した。この期間だけに限らず、国語科や保健体育科では相互参観をよく実施しており、授業力向上に向けた取組が行われた。
【自己評価】 B

(イ) 生徒の「学力がついた」と感じる割合60%以上

実績等	数 値
令和6年度数値実績	65.0%
令和7年度数値目標	70.0%
令和7年度数値実績	70.1%
【取組と自己評価】	
・数値目標は達成したが、継続してきめ細かく丁寧な指導の実践と、教職員の授業力向上を図ることで、より満足度を上げる必要がある。	
【自己評価】 B	

ウ 生活指導 「まもる」

(ア) 特別指導年間10件以下

実績等	数 値
令和6年度数値実績	29件
令和7年度数値実績	13件
【取組と自己評価】	
・生徒数の減少とともに、生徒一人一人に教職員の目が行き届くようになり、親身できめ細やかな指導により、特別指導が減少した。また、前例にとらわれず、生徒の特性に合わせた指導の実践に務めたことも、特別指導の再発を抑えることにつながった。	
【自己評価】 A	

(イ) 遅刻者数1クラス2人以下

実績等(クラス平均遅刻者数/1日)	数 値
令和6年度数値実績	2.3人(延べ遅刻回数:6630回)
令和7年度数値目標	1.5人(延べ遅刻回数:4500回)
令和7年度数値実績	2.0人(延べ遅刻回数:5236回)
【取組と自己評価】	
・2人以下にする目標は達成できなかったが、延べ遅刻回数は約1400回減少した。	
・単に遅刻者を朝早く来させる指導から、生徒自身に生活習慣を振り返らせ遅刻の原因を考えさせる指導を工夫するよう教員を指導した。	
・今後も多様なアプローチを工夫し、生徒の基本的な生活習慣の確立を図る。	
【自己評価】 B	

エ 進路指導 「つかむ」

(ア) ジョブキャンプ参加者10名以上

実績等	数 値
-----	-----

令和6年度数値実績	2人
令和7年度数値目標	90人
令和7年度数値実績	64人
【取組と自己評価】 ・部活動公式戦との日程重複などで数値目標の達成には至らなかったが、参加生徒への効果は大きい。 ・「人間と社会」「総合的な探究の時間」とキャリア教育を関連付け、早期に将来の自分を考えさせる機会として推進していく。 【自己評価】 B	

(イ) 進路決定率90%以上

実績等	数 値
令和6年度数値実績	89.0%
令和7年度数値目標	90.0%
令和7年度数値実績	94.0%
【取組と自己評価】 ・学年と進路指導部がよく連携しただけでなく、丁寧に三者面談を行うなど、親身な指導を心掛けた。 ・4月の年度当初の保護者会で、保護者向けに進路指導部から説明する時間を設定することが定着した。 ・スキルアップ推進校の行事や「人間と社会」「総合的な探究の時間」をより活用し、早期から進路を見つめさせる機会を設定する。 【自己評価】 A	

オ 特別活動・部活動・教育相談 「つなぐ」

(ア) 部活動加入率65%以上

実績等	数 値
令和6年度数値実績	52.0%
令和7年度数値目標	65.0%
令和7年度数値実績	70.5%
【取組と自己評価】 ・昨年度よりも部活動加入率が上がった。新入生への働き替えが改善したことによる。 ・部活動体験週間や、高体連傘下以外の競技性が伴わない「遊び」的な要素を含んだ団体の創設など、生徒の居場所づくりを引き続き検討したい。 【自己評価】 B	

(イ) 教育支援委員会参加率90%以上

【取組と自己評価】 ・校内研修の時間にしっかりと位置づけることができ、課題を抱える生徒について、職員間の共有が図られた。 ・研修方法もただ説明を聞くだけでなく、AL的な手法を用い、より主体的に参加できるものとした。 【自己評価】 A	
---	--

(ウ) 中途退学者数10名以下

実績等	数 値
令和6年度数値実績 (令和6年3月1日現在)	11人
令和7年度数値目標	8人
令和7年度数値実績 (令和7年3月1日現在)	12人
【取組と自己評価】	

- ・安易に退学させて、学ぶ機会を喪失させないよう、粘り強く指導する必要がある。
- ・小中学校で不登校傾向にあった者への有効な手立てが見つけにくい。
- ・家庭、保護者の協力が不足しており、学校教育の必要性に対する理解度が低い。

【自己評価】 B

カ 募集広報活動

(ア) 地域交流行事年間3回以上

【取組と自己評価】

- ・大田区ガーデンパーティー、池上まつり（ボランティア）、地域音楽祭、Oh!!盛祭など地域行事への参加と天文部による星空観測会など、生徒が前面に出ての参加を達成できた。

【自己評価】 A

(イ) HP更新200回、インスタグラム発信100回

実績等	数 値
令和6年度HP更新数	200回
令和7年度HP更新目標数	200回
令和7年度HP更新数	280回

【取組と自己評価】

- ・本校を知りたい場合、必ずHPを見るので、HP更新回数をさらに上昇させる必要がある。部活動ニュースを発信する部活動等が少なく、次年度の課題であると考え。
- ・インスタグラムの更新回数については検討したい。

【自己評価】 B

Ⅲ 次年度の主な課題と改善策

1 中途退学防止と教育相談体制

生徒に高等学校で学ぶ意義や楽しさを理解、実感させ、主体的に学校生活に取り組ませることが課題である。また、基本的な生活習慣が確立しておらず、精神的にも幼く自己肯定感の低い生徒が多く見られる。こうした生徒に今後の見通しを持たせて、「人々に愛され、社会に貢献できる人間」として育てていくためには、生活指導・学習指導・進路指導を一層関連付けるのは言うまでもなく、全教職員がそれぞれの場面で丁寧かつ諦めない指導に取り組んでいくことが必要である。今年度は、SCも二人体制となり、教育相談機能の強化に取り組み一定の成果が得られた。引き続き教育相談体制を充実させていくとともに、外部機関や家庭とも連携して、悩みを抱えている生徒の早期発見と課題解決に努める。

2 学習指導

学力に不安を感じている生徒や学習に取り組む姿勢が不十分な生徒にも「わかるまで」「できるまで」取り組ませる粘り強い指導を行っていく。そのために、教員間で授業における悩みや成果を上げた取組などについて共有化し、学校として総合的授業力の向上が次年度の課題である。

今年度の1学年からスタディサプリ活用を学年全員で取り組んでいる。次年度以降も新入学年がスタディサプリを導入することで、再来年度には全校体制での取組とできる。個々の生徒の学力の実態把握に努め、学習支援を行い、学習時間を増やすことで、学力の向上を図っていく。また、C4t hと連携した教育ダッシュボードの活用を推進する。

3 生徒指導・特別指導

特別指導では、前例にとらわれず生徒の特性に合った指導を推進したことにより、生徒自身が良く自己を見つめなおし、変容が得られるようになった。また、教職員に対し、安易に進退を迫る特別指導ではなく、生徒に親身に寄り添い、粘り強く指導を続けさせた結果、昨年度よりも特別指導を減少させることにつながった。軽微な服装違反などは散見され、今後も生徒各々が自らその規範の意味を理解し、より良い行動ができる段階にまで、主体的な意識を高めていく必要がある。生徒会役員や部長会等でのリーダー育成により、主体性を高めていく指導を進めていきたい。また、保護者にも引き続き指導に対

する理解を求め、家庭と連携した指導を行っていく。

4 進路指導

学校評価アンケートにおいて、生徒・保護者から本校の進路指導が丁寧に行われているとの評価を得ている。キャリア教育委員会を中心に、「人間と社会」「総合的な探究の時間」がより計画的・組織的に機能するよう見直しを行った。次年度もこの体制を推進し、卒業後の長い人生を見据えたキャリア教育を推進する。また、「進路の手引き」・「進路ノート」・「スタディサプリ」の活用・進路ガイダンス等、校内指導体制を不断に見直していく。「東京版Classi」の活用により、日頃の家庭との連絡と保護者会、三者面談を充実させることで、保護者の理解促進を図っていく。

5 広報活動

今年度、本校と同等の学力層の都立高校入試倍率が軒並み1倍を切った状況の中では善戦したと言える。生徒募集の充実を図るには、本校の独自の魅力を更に発信していく必要がある。全教職員間で今一度、本校の良さとは何かよく分析し、今後の募集対策に反映することが大きな課題である。教育活動の一層の充実とその情報発信により、地域の期待に応える学校としての役割を果たす。

6 学校経営・組織体制・その他

今後も教職員の心身の健康の維持向上及び働きやすい職場づくりに努める。次年度も「教職員アウトリーチ事業」を導入するなど、全教職員の相談体制を充実させていく。各委員会等による組織的な取組が緒についてきており、次年度も発展的にこの動きを進めることで、教職員一人ひとりの経営参画意識を高めて組織的に課題解決を図り、新しい案や改善に積極的に取り組み活力ある職場風土を醸成する。